様式第３号

令和４年度　学校経営報告（自己評価）

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
ア　高い志の育成	**主体的な進路意識の高揚**	・社会課題の解決に関心のある生徒の割合 60%以上 ・２年生 10 月までの進路希望先決定 50%以上、大学・短大希望者は学部学科決定 70%以上	・社会課題の解決に関心のある生徒の割合は 64.8%であった。 ・2 年生 10 月までの進路希望先決定 67%、大学・短大希望者の学部学科決定 58%。 ・１年生は、企業訪問を行ったことで興味関心を持つことができた。 ・社会問題に興味が沸いた生徒は増えているが解決に関心を持つことができたかは疑問である。	B	・総合的な探究の時間の授業、講演会、学外調査等が良いきっかけになった。 ・２年生 10 月には７割近くが具体的な進路を決定していた。一方で全く決まっていない生徒 19%に対しての指導が必要である。 ・引き続き「J チャレンジ」を通して、興味関心を持たせていきたい。 ・社会課題への関心と進路意識にどう結び付けていくのか、学年や各教科が考えて取り組むことで、生徒に関連付けて考えさせるようする。
	総合的受験力の向上	・外部模試の成績向上（中間層の向上） ・志望理由書、面接、小論文対策 ・進学講習参加者増加と満足度向上 ・３年生１学期までの進路目標定着 90%以上	・進路個別指導が進路実現につながった。３年生１学期までの進路目標定着は 96%。 ・3 年生の土曜講習や、夏季講習を通じて、過去問題や地形図の読解等に取り組み、一般入試での得点力向上を図った。志望理由書、面接、小論文対策においても、教科の専門性を活かした指導を行うことができた。 ・週課題や講習などで、模試の問題を題材として取り上げるなど、模試に対する意識向上を図った。 ・小論文や面接、理由書の対策などを職員全体で協力して、担当生徒の進路に応じた指導を行うことができた。 ・１年生の土曜講習受講者は、国語 16 名、数学 17 名、英語 13 名と少数であったが、受講生徒は熱心に取り組み、満足度は高かった。２年生の土曜講習の参加希望者は数学 20 名、英語 9 名、国語 14 名と少なかった。	B	・小論文・面接指導を１学期末から始めたことによって進路実現に繋げられた。さらに、低学年時から興味関心に応じて行動し、自ら学ぶ経験を積んでおく必要がある。 ・講習内容が科目担当に任されていることもあり、科目間、教科間の情報交換の機会があるとよかった。志望理由書等の個別指導に関しても同様である。 ・３年生については、模擬試験の範囲に授業進度が追いついていないので全ての大問に答えることができない科目もある。 ・個別対応の進路指導は、負担は大きいが効果も大きい。継続したい。 ・自分の意見や考えを相手に伝わりやすいように表現する力は、面接試験において必要な力になるので、今後を見据えて取り組ませたい。 ・英国数を中心に教科書レベルの基礎問題を確実に解けるような指導をしていく必要がある。 ・特に運動部顧問が、補講と大会とが重なり、実施が困難な場面が見られた。・土曜講習に関しては、見直す時期に来ている。
	変化する入試制度への対応	・大学入学共通テストに対応した継続的な進路指導の展開 ・英検（準２級以上）合格者の増加と下位層の学力向上 ・各種検定試験	・講習により共通テストへの対策を行うことができた。 ・２年生は、英検（1 月本校会場）の受験者数が増えた。 ・土曜補講を通じて、共通テスト対策用の問題集や模擬試験問題を使い、指導した。 ・出題傾向（センター試験との相違点等）についての情報収集に努めながら指導を行った。	B	・意欲の高い生徒の学力向上を図ることができた。 ・共通テスト受験生と推薦入試受験生を分けて指導をしたほうが良い。 ・思考力を要する問題に対する対応力の強化をしていく必要がある。 ・基礎学力・基礎知識不足により共通テストの難易度に対応できない生徒がいる。共通テストに焦点をあてるかどうか検討が必要である。

様式第３号

		受検者の増加	・数学検定の校内実施を計画し、受検を呼び掛けた。 ・１・２年生の土曜講習を英検対策とした。一次試験合格者に対して英語科全員で面接指導をした。検定試験に対する意識が向上した		・情報Ⅰの授業は１年次で完了するので、大学進学希望者の２年生以降の継続的な指導を計画する。 ・入試制度の研究と対策（生徒への還元）を行っていく。 ・テスト前に家庭学習時間を計画・実施させ記録記入させたことが成果につながった。
イ　学ぶ力の育成	新学習指導要領への対応	・新学習指導要領の理解の促進と、シラバスと観点別評価表の作成および修正 ・BYOD 対応のための教材研究 ・校内外の研修への教員の積極的な参加	・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善研修を実施し、新課程のシラバスと観点別評価表の作成を行った。 ・iPAD を活用した授業を展開した。 ・初めての観点別評価であったが、これまでの授業や課題、定期試験での評価材料を３観点に割り振ることで対応できた。 ・観点別評価に関しては、スムーズに移行することができた。 ・毎回の授業で振り返りを行い、生徒の理解度を確認することができた。また、計画的に演習を行い、評価の機会を設けることができた。 ・新学習指導要領については昨年度から理解の促進のための研修を行っていたこともあり、観点別評価の実施も大きな躓きは無く実施できた。	B	・新指導要領および観点別評価についての理解は深まった。今後も評価方法を改善する。 ・評価の基準、在り方、方法については引き続き協議、検討が必要。 ・主体性の評価の仕方、基準等には課題があるため、より考察が必要。 ・他教科とも連携して試行錯誤しながら本校に合ったやり方を工夫する必要がある。また、実技種目の欠課時数の多い生徒の評価についても、検討が必要である。 ・BYOD に関する職員研修をもっと増やしたい。
	基礎学力の定着	・「家庭学習の中心」が「自分で必要と判断した学習」である生徒の割合 25%以上 ・家庭学習時間の平均が週 12 時間以上 ・自ら進んで授業に取組む生徒の割合 50%以上	・「家庭学習の中心」が「自分で必要と判断した学習」である生徒の割合は 23%。（１年生 10%、２年生 20%、３年生 39%） ・家庭学習時間の平均は週およそ 10 時間 48 分。（１年生 8.5 時間、２年生 10.5 時間、３年生 13.5 時間） ・自ら進んで授業に取組む生徒の割合は 32%。（１年生 24.4%、２年生 23.6%、３年生 47.5%） ・授業形態や、課題の設定を工夫することによって、主体的に授業に参加する姿勢や、家庭学習に取り組みやすい雰囲気づくりを行った。 ・週課題、小テストを中心に学習内容の定着を図った。体育では、苦手種目の取り組みも意欲的に行う生徒が増えた。	C	・授業への能動的な態度、家庭学習時間の増加につなげるためにも、生徒の学習意欲を高める手立てを検討する。授業の中での理解度向上はもちろん、授業外での主体的な学習を行うための仕掛けづくりを考えたい。 ・理科の実験中は、一見すると能動的な活動に見えるが、その実験を通して科学的に何を学ぶかという点への能動的なアプローチをしない生徒が多い。 ・１・２年生は課題中心の学習をしているようだが、学習習慣をつけて基礎学力を定着させるためにはそれでもよいのではないか。 ・数値で確認することができる新体力テストの記録向上を今後も継続し、自ら進んで授業に取組む生徒の割合を増やしていく。 ・毎日コツコツ取り組ませる仕掛けが必要である。 ・１Ｐノートを継続しているが学習時間の増加にはつながっていない。

様式第３号

	読解力や論理力の育成	・各教科での読解力を意識した授業展開 ・聞く・書く・話す等まとめる力の向上 ・朝読書の充実と読書量の増加 ・新聞を毎日読む生徒数の割合20%以上	・文章読解を意識した授業展開は恒常的にできた。 ・聞く・書く・話す等まとめる力は、特に新課程の１年生に習得させることができた。授業での発問や、定期試験等での出題を工夫することで、読解力の向上を目指した。新聞を活用したり、80 文字でまとめる課題を課したりした。 ・生徒どうしでに問題の解説をさせたり、グループなって問題に取り組ませたりして、聞く力、話す力の向上を図った。 ・４技能のバランスを意識して授業を行うことができた。「話す」機会をできるだけ設けた。 ・保健の授業では、教科書の内容を要約する場面を増やし、各自が人に説明できることを要求した。体育の授業でも会話する場面を増やし、人に話す場面を増やした。 ・新聞記事を読ませ、内容を理解させてから、問題に取り組ませた。 ・２年生は、週に３回は朝読書の時間を設けた。新聞に目を通すように掲示を工夫した。 ・３年生は、朝読書の時間を設けなかったが、例年よりは読書を行う生徒が多くいた。新聞を毎日読む生徒は6%であった。	B	・持参した単行本を読む生徒が少しずつではあるが増えてきた。 ・国数英を中心に週課題や小テストの取り組みは概ね良好であったが、自ら進んだ学習にまで踏み込むことのできる生徒が少なかった。毎日コツコツ取り組ませる仕掛けが必要である。 ・自分の考えを人に説明する力をより身に着けさせることは、今後も必要である。 ・理科では、長い問題文を段階ごとに図や化学式、系統図などを用いて整理していくことができない。今のスマホ世代（動画世代）にとっては、長い文章を見た瞬間に拒絶反応が出ると思われる。 ・資料から情報を読み取ることはできている。今後は更に予測や発展した考察ができるように指導する。 ・３年生になっても新聞を全く読まない生徒の割合が 41%いたことが大きな問題だと考える。教室にある新聞をどのように活用するのか学校・学年の取り組みをより明確にする必要がある。
ウ 人間力の育成	生徒会活動や学校行事の充実	・学校行事の事前事後指導の実施 ・生徒会活動や学校行事の運営に主体的に携わる生徒 30%以上	・主体的に携わることができたと答えた生徒は 93%	A	・活動に必要なコミュニケーション能力等をさらに高めたい。
	充実感と効率を高める部活動の実践	・年間計画作成と周知、活動目標の達成 ・満足度 80%以上と県大会出場者 50 人	・部活動ごとに月間指導計画と活動目標を設定した。 ・満足度文化部 90%、運動部 89.4% ・総体県大会出場者 49 人。	A	・目標達成の振り返りと検証を実施し、更に効率的な活動になるよう、取り組む必要がある。
	規則正しい生活習慣とマナーの確立	・本校の生徒らしい身なりや行動の実践 ・全校生徒の自発的挨拶と対応力向上 ・服装頭髪検査	・自発的な挨拶はまだ十分にできない生徒もいるが、登校指導時や職員室入室時では、ほとんどの生徒が挨拶している。学校全体に落ち着きがみられた。 ・頭髪服装については概ね良好であった。違反者は、ほぼ無し。 ・３年生になって、日常の挨拶	A	・生徒自ら考え、頭髪服装等、正せる意識の向上を目指す。挨拶だけではなく、規範意識とマナーの向上を目指す。 ・集会等で挨拶の大切さを呼び掛けていきたい。どの集団、どんな場所でも挨拶ができる生徒を増やしていく。

様式第３号

		時の違反０人を2/3 以上 ・進路実現に向けたマナー等の確立	などは面接試験を意識して、1･2 年時よりも積極的に取り組んでいた。		・修学旅行を通して、マナーを意識した行動をとることができた。 ・生徒の自覚は年々高くなってきている。
	人権意識の涵養	・生徒の人権意識や人権感覚の涵養 ・配慮が必要な生徒への適切な対応 ・生徒間の対人トラブルへの適切な対応	・配慮が必要な生徒に対しては、スクールカウンセラー・養護教諭・保護者を交え、その都度適切に支援ができた。 ・友人関係によるトラブルが発生したが、早期の対応により、大きな問題に発展しなかった。	B	・生徒からのカウンセリングの申し出は少なく、担任等から本人や保護者に紹介するのが現状である。生徒への周知を積極的に行っていく。 ・他者を思いやる心の教育の実施とトラブルにおける早期の対応を継続していく。
エ　安心・安全な環境	防災体制と防災教育の充実	・地域防災訓練の参加者 70%以上、不参加者の追指導と合わせて 100%の参加 ・安否確認訓練において１回で応答する生徒 90%以上	・地域防災訓練は 35%参加、40%未実施・対象外、25%不参加（自己都合、体調不良や部活動等）であった。不参加の者に対しては、全員を対象に追指導を実施した。安否確認では、第１回(一斉メール)92%、第２回(Classroom)92%の応答があった。事後、全生徒との連絡方法の確認を行った。防災訓練については、講話、体験を取り入れて実施した。	B	・昨年度(19%参加)よりも参加率は上がったものの、新型コロナウイルスの影響は依然大きく、実施されない地区も大きな割合を占めた。安否確認訓練は、引き続き継続的に丁寧な指導を進めたい。 ・学校で実施する防災訓練について、今後、演習等の内容の充実を図りたい。
	安全教育の充実	・生徒の感情制御力の向上 ・交通事故発生件数 10 件以内 ・SNS の不適切利用者指導が 10 人以内	・交通事故発生件数は９件であった。県教委によるネットパトロール摘発件数１件であった。 ・SNS の不適切使用について、加害生徒を特定できなかったが、学年集会で１件指導した。指導の結果、その後の被害は確認できなかった。	A	・交通ルールとマナーの徹底を継続的に行う。違反者に対する個別指導も継続していく。 ・被害、加害の立場から適切な行動をとることのできる生徒の育成を行っていく。
	治癒率の向上と感染症の予防	・健康診断での心電図、貧血、尿検査の有所見者は 100%受診（検査、治療） ・歯科・視力の受診率 60%以上 ・生徒、保護者の健康に関する意識向上 ・マスク着用や手指消毒等の徹底	・尿検査以外は、目標を達成できた。視力については、初めて６０%を超えるなど地道な呼びかけが結果にあらわれてきた。 ・定期的な保健便りの発行により、感染症予防に関する発信を続けた。	A	・感染症予防意識調査を実施するなど啓蒙活動を充実して行えた。 ・生徒間の意識がさらに向上するための施策が今後の課題といえる。

様式第３号

	教育相談体制の充実	・全生徒の性格診断検査実施と結果共有 ・困り感のある生徒や問題を抱えた生徒への支援体制の確立と連携の充実 ・気軽に相談できる環境の確立	・性格診断検査お全生徒に実施し、結果については、担任と養護教諭が共有した。 ・困り感のある生徒に対しては、スクールカウンセラー・養護教諭・保護者を交えて連携を取り、スムーズに対応し、適切に支援した。 ・担任の先生を中心に情報共有を密に行い、早い対応を行うことができた。カウンセラーとも連携した。生徒情報は、学年で共有ができた。	B	・性格診断検査について、大きな問題を抱えている生徒はいなかった。診断検査は、継続していきたい。 ・教育相談に関しては生徒や保護者もいまだに警戒して気軽に利用できない感がある。この警戒心をどのように解いていくかが今後の課題である。
オ　地域との連携	地域への貢献	・地域が抱える課題に取組む生徒の増加 ・ボランティア活動や地域行事への参加による生徒の社会性・公共心の向上	・沼津クリーン週間に、本年度は210名が参加した。 ・部活動単位でのクリーン作戦参加、市内海岸清掃、サマーボランティア活動への参加等コロナ禍ではあるが増加傾向にある。	B	・参加者は、真面目にゴミ拾いに取り組んだ。参加者210名は過去最高であった。 ・自発的な参加を促進し、ボランティア精神を継続的に養い、社会性や公共心を向上させていく。
	広報活動による情報発信	・ホームページやツイッターの内容の充実と更新回数増加（閲覧状況の調査） ・学校説明会、一日体験入学参加者の理解度や満足度の向上 ・近隣中学校への積極的訪問と情報発信	・更新をこまめに行い、本校の活動を紹介することができた。ホームページの画面構成を改訂した。ツイッターでは、修学旅行時には１記事につき、1000回近い閲覧があった。 ・６月に管理職による中学校訪問を実施。38校を訪問。 ・中学校へ出向いての個別説明会、11校で実施。 ・120周年記念式典・講演の企画から携わり、計画・実施した。 ・オープンスクールを参考になったとする中学生とその保護者の割合は100%であった。	A	・広報活動については、幅広い生徒の活動を紹介できるよう、多くの教員が担当できるようにしたい。 ・120 周年記念式典・講演を、滞りなく順調に運営できた。 ・オープンスクールでは、よりよい授業を行うことで、参加者に授業内容や学校の雰囲気のよさを伝えていく。
	新構想高校開校への準備	・オンリーワン・ハイスクール事業の推進による魅力あるカリキュラム研究 ・探究学習検討委員会を中心とした総合的な探究の時間の見直しと次年度の検討	・１年生の職業訪問にあわせ、マナー教室、報告発表会など新たな事業を行い、生徒の満足を得た。また、総合探究講演会を実施し、進路決定や学習意欲の向上に役立てることができた。 ・１年生の活動を含め、総合探究講演会の開催など適切に事業を行うことができた。 ・委員会を開催し、今年度の課題を見出し、来年度の改善につなげることができた。	B	・来年度の沼津西高校との合同発表会に向けて、連携を密にし、協同性を高めていく。 ・新構想高校の開校構想がゼロベースになったため、この項目自体の見直しが生じてしまったが、「総合的な探究の時間」の見直しとＪチャレンジⅠ・Ⅱへの取組は、継続していく。
カ　頼もし	教職員研修の充実	・年間３回の校内研修の充実と授業改善 ・校内における教職員同士の学	・第１回研修：6/24(金)定期訪問，KH-navi の使い方 ・第２回研修：9/21(水)観点別評価の再確認 ・第３回研修：10/27(木)研究授業,グループワーク	B	・研修におけるグループワークでは、活発な意見交換が行われており、充実した研修になっている。職員間の連携や意志疎通がより的確行われるよう、更なる同僚性の向上の推進を継続していく。

様式第３号

い教職員		び合いによる研修の充実と同僚性の向上 ・AL 型授業の深化と観点別評価の推進	・第４回研修：2/9(木)Google Education のより効果的な活用 ・観点別評価、AL 型授業についての研修を、評価の算出の実践、専門家からの教授、授業参観と意見交換など様々な方法で実施した。観点別評価の理解が深まり、新たな改善点を発見することもできた。		・観点別評価の結果を生徒に還元し、生徒の学力向上につながるように、授業改善に取り組んで行く。 ・観点別評価、AL 型授業についての研修で、実践的な能力が向上した。 ・授業法については、今後も研究が必要である。
	ワーク・ライフバランスの推進	・全教職員による業務効率化実施 100% ・時間外業務時間の対前年比５%減少 ・全部活動の活動目標、年間指導計画作成と効率的な活動の展開	・受付文書の印刷や受付業務を担当者へのメール転送へと簡素化した。教科会や分掌会議、学年会議等を時間割に組み込まれ、定期開催が可能。Google Education をほとんどの職員が活用した。 ・時間外業務時間前年比 13.8%増 ・各月の活動計画と目標を提出し、計画に則った活動を行った。	B	・会議等の時間短縮や部活動の活動計画見直しを行い、時間外勤務の削減をしていく。また、業務の更なる効率化と平準化を推進する。 ・部活動においては、計画的な休養日を設定する。
	コンプライアンスの徹底	・コンプライアンス研修を年３回実施 ・体罰、パワハラ、セクハラゼロ ・監査、検査等の指摘事項ゼロ	・第１回研修：4/26(火)不祥事根絶 ・第２回研修：8/29(月)交通安全 ・第３回研修：12/19(月)情報管理 ・個人情報の不適切管理事案や成績処理での誤入力事案が発生した。 ・体罰、パワハラ、セクハラのアンケートを１月に実施。すべてゼロ回答だった。 ・監査、検査、調査における指摘事項は０件であった。	B	・次年度は、情報セキュリティや成績処理に関する研修に重点をおいて実施する。 ・職員室内の鍵の管理方法を変更した。 ・成績処理方法について改善を行う必要がある。 ・事務室業務においては、引き続き適正に事務処理を進める。

様式第５号

令和４年度　学校関係者評価実施報告書（まとめ用）

学校番号	20	学 校 名	静岡県立沼津城北高等学校	記 載 者	髙石　達寿

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	自己評価	関係者評　価	意見
ア　高い志の育成	**主体的な進路意識の高揚**	・社会課題の解決に関心のある生徒の割合 60%以上 ・２年生 10 月までの進路希望先決定 50%以上、大学・短大希望者は学部学科決定 70%以上	B	B	・教員が早くから生徒の希望を掴み、進路を導く細かい指導が必要。生徒への動機付けを適切に教員が行わなければならない。 ・地域に開かれた学校は、地域の課題を大人と一緒に解決できる。その活動こそが生徒が主体的に活動することにつながる。 ・探究活動について、高校生が社会を知ることは必要であり、その姿勢を学校が作ることも必要になる。 ・探究活動を通して、社会問題について興味を持つことはよい活動である。
イ　学ぶ力の育成	**基礎学力の定着**	・「家庭学習の中心」が「自分で必要と判断した学習」である生徒の割合 25%以上 ・家庭学習時間の平均が週 12 時間以上 ・自ら進んで授業に取組む生徒の割合 50%以上	C	C	・目標のない生徒に向けて、とりあえず、大学進学を目指す雰囲気づくりをしたら、勉強する気持ちが高まる。 ・１，２年生の家庭学習の中心は宿題であることが資料から読み取れる。１日１時間でも勉強すればいい。学年が上がれば自然にゴールに向かって勉強する。 ・課題に取り組み、頑張ることも必要。学習への自主的な取り組みは検定、大会など分かりやすい目標を立てることで見えてる。 ・３年生の学習時間が増加しているのはよい。必然的に学ぶ雰囲気が感じられる。 ・ガンガン勉強をさせようとしても生徒はついてこない。自分の進路と結び付ければ、学習意欲が向上する。
ウ　人間力の育成	**充実感と効率を高める部活動の実践**	・年間計画作成と周知、活動目標の達成 ・満足度 80%以上と県大会出場者 50 人	A	A	・全校生徒の７分の１が県大会に出場していることは評価できる。 ・満足度が、文化部 90%、運動部 89.4%と、ともに高いことは評価できる。 ・退部や転部をする者が極めて少ないことも、よいあらわれである。